

# マイクロシステム融合研究開発拠点

実施予定期間：平成 19 年度～平成 28 年度  
総括責任者：里見 進（東北大学 総長）  
協働機関：(株)リコー、(株)トッパン・テクニカル・デザインセンター、(株)メムス・コア、(株)北川鉄工所、住友精密工業(株)、トヨタ自動車(株)、日本信号(株)、日本電産コパル電子(株)、日本電波工業(株)、パイオニア(株)、メムザス(株)豊田中央研究所(株)、ニッコー(株)、日本航空電子工業(株)、古河電気工業(株)、(株)デンソー

## I. 概要

20 世紀後半の LSI 技術の驚異的發展によって、以前には想像できなかった情報化社会が訪れている。今後、LSI が支える情報通信技術のさらなる発展と徹底的普及とによって知的生産性が向上し、そのインパクトは、産業革命が物質的生産性に与えたのと並ぶものになると考えられる。また、生活の視点からは、高齢化が進み環境問題への対応が求められ、あらゆる空間で、安全・安心・健康を実現できる社会システムが求められる。また世界的潮流として、IMEC やオルバニーのなどの例に見るように欧米では複数の企業が結集して拠点を作り、知を結集させて「特異な技術」を克服し強い国際競争力を生み出そうとの動きが加速している。

我が国の将来を考えると、情報通信技術の発展・普及と社会システムの改革とを両輪として、知的生産性向上と働き方の多様化とを同時に進め、強い国際的産業競争力に裏打ちされた社会を持続的かつ健全に発展させる戦略が重要である。そのため、情報技術の基盤である LSI 技術をさらに発展させていく必要があるが、一方で、LSI 開発は従来のように単独企業で取り組める規模を超えており、開発スピードや投資などの問題もあって日本企業の撤退が進んでいる。

このような状況で、最先端 LSI 技術と MEMS (micro electro mechanical systems) 技術とを融合し、限界が近付いている LSI の微細化追及からのパラダイムシフトを起こし、安全・安心・健康を実現できる社会システムを支える高度なマイクロシステムを、欧米に負けないスピードと資本、総合的な研究開発力で実現していく必要がある。そのためには、技術の融合という視点とともに複数の企業や大学の知の結集を可能とする「場」とそれを支える知財や人材、研究開発から産業化へのしくみといったシステム改革の視点も同時に構築せねばならない。

## 1. 機関の現状

本学には半導体研究の輝かしい歴史と蓄積とがある。その半導体微細加工に多様な技術を組み合わせ高付加価値のシステムデバイスを作る MEMS 技術に関する研究開発を 35 年程前から精力的に推進してきた。共用施設を学内外の約 400 名の研究者で利用して大きな研究成果をあげており、本分野で世界的にトップレベルにあることは内外の広く認めるところである。開発した技術を世の中に発信するだけでなく、大学の共用施設を活用し、企業との共同研究や技術移転を積極的に行い、産業支援や製品化に貢献してきた。日本経済産業新聞の調査では、研究総括の江刺正喜教授が率いる研究室が「我が国で最も産業界に貢献している」との評

価を得ている。この他、仙台市、宮城県、および東北大学を中心にして「MEMS パークコンソーシアム」を 2004 年 10 月に設立し、これに 100 社以上が参加して、MEMS を中心とする産業振興や人材育成を行っている。

## 2. 拠点化の対象とする先端融合領域及び研究開発

### a. 概要

このような土壌の上に、大学の知が触媒となって様々な企業、研究者が開かれた研究開発システムのもと結集し、集積化マイクロシステムを中核に、機械、電気・電子、材料、化学、電気化学、バイオ工学、医学などの様々な技術を融合させて我が国の次世代産業の種を創る知的活力源となる研究開発拠点を形成する。そうすることで、様々な機能を担うマイクロシステムが、情報処理・記憶機能を担う LSI と融合し、安全・安心・健康を支える社会的イノベーションをもたらさう。また、システム改革の視点からは、次世代産業の種を早期にイノベーションに繋げるため、多領域にわたる企業や研究機関が、産学・産産学連携を行って総合的な知の結集で、研究段階から事業へと結びつけることができる開かれた「場」を構築する。そのためには、参加各企業が安心して連携できる研究開発のシステムや新規な知財ルールの構築、人材育成にも取り組んでいく。そうすることで、研究から事業化への間に横たわる障害を克服しスピードを持って事業化への道筋を提供できる「場」とすることができ、強い産業競争力を生み出せる。

### b. LSI 技術とマイクロシステム技術との融合

ムーアの法則に沿った LSI の発展、すなわち微細化の追求には明らかに物理的経済的限界が見えつつある。そこからのパラダイムシフトの有望な方法が、LSI 技術とその他の技術との融合 (More than Moore と呼ばれる) であり、その中でも最もイノベーションが期待されるものが MEMS を中心とするマイクロシステム技術との融合である。これは長期的ビジョンを持って進むべきマイクロシステム分野のメインストリームである。

LSI とマイクロシステムとをチップ内で集積化する方法として、次の 3 つの方法がある：1) LSI 形成後 LSI に損傷を与えない低温工程で LSI 上にマイクロシステムを形成 (LSI first)、2) シリコンウエハ内部に LSI 製造の高温工程に耐えられるマイクロシステムを形成した後、その表面に LSI を形成 (MEMS first)、3) LSI とマイクロシステムとを別々のウエハ上に形成し、ウエハレベルで両者を結合 (Wafer-level integration)。最先端デザインルールの LSI と最先端 MEMS の双方に損傷を与えないで最高のパフォーマンスを実現するには、装置開発やプロセス設計、さらには低温接合、実装、マイクロシステムと LSI の統合設計など多くの基盤技術の研究開発が必要である。これらの技術が基盤となり、様々な LSI 集積化マイクロシステムが実現されていく。東北大学では、最初の 3 年間でこれらの技術のための装置・設備を整備し、デバイスの研究開発と並行して基盤技術を構築する。

### c. 分野融合のための開かれた研究開発の「場」の形成

我が国では、高価な装置が研究室毎に設置されるので、全体の研究開発投資という意味でも無駄がある。また、自らの研究室内の装置だけでできる研究を行い

がちであり、総合的で実際的な研究開発は行えない。東北大学には施設・装置共用の実績があり、これを基に自立的な運営体制を可能にするスキームを構築する。ここで共通性の高い基盤技術の研究開発を継続して行い、それを求心力に多くの応用展開企業が産学、産産学連携のもと次世代産業創出の場を作る。

実際の研究開発方式として「乗合ウェハシステム」を採用する。マスクセットだけで数千万円以上する最先端 LSI を 1 つの研究プロジェクトで試作することは難しい。まして、研究開発レベルのシステムのために高価な LSI をリスクを負って試作してくれるファンドリリーはなく、融合化マイクロシステムの実証は実質的に不可能となっている。したがって、複数の研究プロジェクトが同じウェハに相乗りする。そうすることで、産業化へのリスク低減が図れ、試作も受け入れてもらい易くなり、研究から産業化までに存在する「死の谷」等の克服を早期に図ることができる。同時に、拠点で生まれた基盤技術が参加企業間で利用できる仕組みや、乗合ウェハシステムで同居した企業間での秘密保持などの法的な保護もはかれる知財や秘密保持の仕組みも構築していく。

### 3. 拠点化構想の内容

#### a. 運営システム改革の内容

東北大学は、総長のリーダーシップの下、部局をまたぐ分野融合型研究活動を支援する「特定領域研究推進支援センター」を 2006 年 4 月に設立し、本センターの下に専属の事務局を立ち上げ、予算管理・執行、人事管理、対外活動などの総合支援体制を整備してきた。

産学連携に関わる知的財産の取り扱いについても新しい制度を協働機関代表者と本学教員からなる運営委員会で、本学知的財産部の参画を得て作成している。生み出された基盤技術の知財については協働機関の利用を担保する「パテントバスケット方式」で運用する。企業との共同発明に対しても本方式は適用され、知財面から開かれた「場」を担保する。また、これにともなう法的な取り決めによって、「場」における産産間の共同研究開発を保護する。

また、MEMS-LSI 融合のための企業からの研究者の採用、協働機関と共同での MEMS 設計実習や教育プログラムの作成や実施など、多様な人材の育成と活用を図る。また、MEMS 分野についての外部に対する定期的集中講義の実施、協働機関から大学への派遣研究者の on-job トレーニングなどによる人材育成を図っていく。

#### b. 企業との協働体制

マイクロシステム技術と LSI 技術を中核に、様々な技術を融合し、技術社会システム分野とも連携しながら、次の 6 つのグループで研究開発を実施する。また各グループと協働機関は毎月融合推進研究会に参加して情報と研究開発成果を共有し、研究の方向性を議論して技術融合を促進する。更に、協働機関は運営会議、スタッフ会議で拠点運営に参加する。拠点内人材育成にも従事する。

##### 1) 次世代携帯機器

協働機関：(株) トッパン・テクニカル・デザインセンター、日本電波工業 (株)、

2) 無線センサ、超高感度・高機能センサ (桑野、小野、田中、長澤、三浦)

協働機関：住友精密工業 (株)、日本電産コパル電子 (株)、(株) 北川鉄工所、パイオニア(株)、トヨタ自動車(株)、

(株)豊田中央研究所

3) 光マイクロシステム

協働機関：(株) リコー、日本信号 (株)、古河電気工業(株)、(株)デンソー

4) バイオ・医療マイクロシステム協働機関：メムザス (株)、日本航空電子工業 (株)、(株)トッパン・テクニカル・デザインセンター

5) 製造・検査装置

協働機関：(株) メムス・コア、ニッコー (株)

### 4. 具体的な達成目標

#### a. 3 年目における具体的な目標

3 年目までに、マイクロシステムと LSI とを一体化した新しい集積化マイクロシステムを実現するための基盤技術を立ち上げる。

ウェハ上で両者を集積化するための基盤技術、具体的には、低温形成技術、応力制御技術、複数の要素の貼り合わせ技術、立体的な配線形成技術などを開発する。また、LSI 上に様々なマイクロシステムを作る乗合ウェハ方式を試みる。様々な応用に向け、具体的なマイクロシステムの研究開発を行い、課題のフィージビリティスタディを完了する。本拠点に最適な研究開発システム構築のため、海外拠点の研究開発システムを調査・研究する。

(1) LSI とマイクロシステム機能一体化 (融合) の技術確立のため、デザインルール 0.35 ミクロン以下の LSI を対象とし、LSI First、MEMS First、Wafer-Level Integration のためのプロセス、装置、実装の各技術の研究を実施し、実用化に向け研究課題を明確化する。LSI ウェハと、MEMS 工程用 SOI ウェハの貼り付けからなる一連のプロセスは、最重要基盤技術としてプロセスの原型を確立する。

(2) 複数のマイクロシステム機能を融合するため、要素となる個別分野デバイスの研究を実施する。MEMS 機能デバイスと、一体化すべき LSI を乗合ウェハ上に試作評価し、システム実現の方法としての妥当性を検証する。これにより実用化に向け研究課題の明確化を図る。

(3) 拠点を担う人材を育成するため、拠点に参加する研究者、学生に対する導入教育プログラム、専門教育プログラムを構築する。また、一般社会人向けの実践的育成プログラムを実施し、不足しているマイクロシステム分野の研究開発者を育成する。

#### b. 7 年目における具体的な目標

最先端デザインルールの LSI とマイクロシステムを一体化するプロセス、装置、実装の各技術の研究開発課題を解決し融合化の基盤技術を確立する。開かれた研究開発拠点としての共用施設を整備し研究開発システムを構築する。また、継続的に行っている各分野のマイクロシステム研究開発と並行して、これらに幅広く適用できる LSI を開発する。さらに、具体的にいくつかの融合化マイクロシステムの機能を確認し実用化の見通しを得る。また、拠点を支えるスタッフの育成や産業界の状況を理解し共同研究を的確にマネジメントできる人材を育成する。

#### c. 実施期間終了後における具体的な目標

開かれた研究開発拠点として、さまざまな企業、研究機関、行政機関と連携しながら継続的に新たな技術開発を先導し、将来応用のためのマイクロシステムの研究・開発を通じて、関連産業の国際競争力向上に寄

与する。

終了時には、開発した融合化の技術が様々な分野で市場競争力のある製品の実用化に供される。それらをもとにしたシステム化により、知的生産性を向上させるための創造空間や、将来の人・車・社会を考えた安全で快適な移動空間など、社会の安心、安全、健康等を実現する新規産業形成を担う。これらは、「パテントバスケット」の知財群および「乗り合いウェアハシステム」に基づく開かれた研究開発システムからなる本拠点により支えられる。また、専門的知識を有すると共に拠点を理解する人材を育成し、本拠点がマイクロシステム産業のイノベーションを支える人材の供給源となる。

## 5. 実施期間終了後の取組

複数の企業や研究機関が共同で研究開発できる施設面、知財面、また研究開発システムである「乗合ウェアハシステム」などに裏打ちされた「場」としての開かれた研究開発拠点で、産産学連携を、大学の知を触媒として継続して実施していく。そうすることで世界的に競争力のある融合化マイクロシステムとその応用製品の研究開発が、設計、要素研究から試作、実用化まで早期に一環して行える拠点が実現する。

さらに教育・人材育成プログラム、国際連携などによって、最高の技術、人材、情報、および機会（テーマ）を最適な時間とコストで社会に提供する場を、民間資金に地方や国の投資を加えて、自立的に維持する。そうすることで、知と産業技術の世界的集積拠点へと発展させていく。

## 6. 期待される波及効果

本構想で整備する共用施設、知財の仕組み、複数の

拠点化構想に関わる研究者等

氏名	所属部局・職名	当該構想における役割
◎里見 進	東北大学 総長	総括責任者
○小野 崇人	東北大学 教授	研究統括
湯上 浩雄	東北大学 教授	次世代携帯機器の研究リーダー
桑野 博喜	東北大学 教授	センサネットワーク・高機能センサの研究リーダー
羽根 一博	東北大学 教授	光マイクロシステムの研究リーダー
末永 智一	東北大学 教授	バイオ・医療マイクロシステムの研究リーダー
寒川 誠二	東北大学 教授	製造・検査装置の研究リーダー

## 8. 各年度の計画と実績

### a. 平成 19 年度

計画； LSI と MEMS の融合（集積化）の基盤技術開発の一環として、乗合ウェアハを設計する。融合化のための接合・貼り合わせ、低ダメージプロセス、実装評価などの基盤技術開発を開始し、個別マイクロシステムの設計・試作などを行う。知財などの取り扱いに関する最適な契約基盤の検討を進める。

### ・実績

次の 5 つの研究分野「次世代携帯機器の研究、無線センサ、超高感度・高機能センサの研究、光マイクロシステムの研究、バイオ・医療マイクロシステムの研究、製造・検査装置の研究」を開始した。それらに対して、

企業が研究レベルで参加できる「乗合ウェアハシステム」は、他の研究機関や企業にとっても魅力であり、国内外を問わず幅広い参加が見込まれる。本拠点は大学の知を触媒とした企業間や研究機関間の垣根を取り払ったわが国初の産学、産産学連携に基づく開かれた研究開発システムとして、技術面、社会システム面からも野心的拠点となっている。協力関係にあるフラウンホーファ研究所などの先進的海外研究機関の参加も期待できることから、日本の研究および産業の一層のグローバル化、国際競争力向上を引き起こすことができる。そのため、研究開発プロセス、社会システムの両面から他研究機関のシステム改革の先駆けとなる。

## 7. 実施体制

東北大学総長のイニシアチブのもと、特定領域研究推進支援センター、本拠点参加全教員、全協働機関の代表者からなる運営委員会を最終意思決定機関とする。さらに、教員代表者および主要企業の代表者からなるスタッフ会議を設け、協働機関の日常的拠点運営への参加を図り、迅速な運営上の意思決定や課題解決を図る。運営委員会やスタッフ会議の下に必要に応じて具体的な課題（施設運営、知的財産、広報、研究開発システム）を担当するワーキンググループを設け、現場に即した機動的な意思決定を可能とする。また、融合推進研究会を設置し、拠点全参加教員、全協働機関で実施されている研究や進行状況の発表、討論を実施する。そうすることで、拠点内の研究の共有化や参加教員、協働機関の融合も図れる。

乗合ウェアハシステムを立ち上げ LSI の設計を進めた。またそれぞれのマイクロシステムの研究を開始し、課題の抽出を行って、次年度以降への研究開発指針を得た。高精度ウェアハ張り合わせ技術や低損傷エッチングプロセス、コンフォーマル製膜用装置開発などの、基盤技術となる LSI と MEMS の融合化技術確立を開始した。また、「技術社会システムの研究」を開始し、新たな仕組みとして、大学、企業が基盤技術の知財を共有する「パテントバスケット」の導入を図った。

### b. 平成 20 年度

・計画； 様々の LSI が試作された乗合ウェアハ上にマイクロシステムを形成する。貼り合わせ、低温プロセ

ス、低欠陥成膜・エッチング、実装などの基盤技術を明確化していく。協働機関との新たな知的財産システム（パテントバスケット）を運用する。乗合ウェハシステムのルール化を実施していく。

・実績

#### (1)次世代携帯機器の研究

「乗合ウェハシステム」により、LSI 設計し、LSI 上での MEMS プロセスの開発をした、デバイスの試作を行い原理を実証した。

#### (2) 無線センサ、超高感度・高機能センサの研究

開発中のマイクロシステムに LSI を集積化するため CMOS 回路の設計および LSI との融合技術を開発した。

#### (3) 光マイクロシステムの研究

走査領域可変や低電圧駆動を狙った光スキャナの試作・駆動に成功した。解像度可変用焦点可変ミラーを製作し、光スキャナと組み合わせることに成功した。また微小光学部品用に、接合技術を開発した。

#### (4) バイオ・医療マイクロシステムの研究

$\mu$  ウェルアレイ電極デバイスを作製し、単一細胞での電気化学信号検出に成功した。流路に実装の集積型水晶振動子センサで抗体の固定、抗原-抗体反応を計測できることを示した。血管内イメージャ用の超音波トランスデューサ用 LSI、体内用の NMR 信号による高解像度イメージングプローブ用 LSI の設計を行った。

#### (5) 製造・検査装置の研究

以下の研究開発を進め、原理実証や機能確認を実現した。①並列電子線描画システム、②コンフォーマル製膜装置、③三次元積層デバイスの実装評価技術、④高速・高精度・欠陥フリーエッチング装置、⑤高周波高分解能磁界プローブ、⑥MEMS と LSI の集積化のためのウェハ貼り合わせ・接合技術。

#### (6) 技術社会システムの研究

海外拠点の調査、乗合ウェハシステムの課題の抽出、必要なルールの策定や仕組みの構築を行った。

### c. 平成 21 年度

計画； 基盤技術を、拠点や共通利用可能な技術として確立する。乗合ウェハシステムのルールや手続き、手順などを構築して、研究開発システムを軌道に乗せ、実用化に向けた研究課題の検討を行う。社会人向け実践的育成プログラムを実施し、不足している本分野の研究者・開発者を育成する。連携企業との知的財産システムを充実させ軌道に乗せる。

・実績

#### (1)次世代携帯機器の研究

集積化無線チップの性能向上の指針を見出した。乗合ウェハ LSI 上への MEMS 試作し課題を把握した。オンチップ高周波スイッチング DC-DC コンバーのモデルインダクタを設計できた。LSI チップに形成したコブレナ線路のノイズ抑制効果を明確化した。マイクロ SOFC 用成膜技術開発に成功し、起電力発生を確認した。

#### (2) 無線センサ、超高感度・高機能センサの研究

表面弾性波センサの応用可能性を明らかにした。環境用センサの LSI との一体化技術を考案した。過酷環境センサの動作確認した。改良した回転体用無線センサを加工装置に取り付けて設計指針を得た。

#### (3) 光マイクロシステムの研究

走査領域可変スキャナの動作を確認した。焦点可変ミラーの開発を行い、スキャナと組み合わせで機能を確認した。

#### (4) バイオ・医療マイクロシステムの研究

集積型  $\mu$  バイオセンサシステムの機能を実証し遺伝

子発現の電気化学的検出を可能とした。抗体固定機能集積バイオ流体研究で細胞収集システム試作ができた。医療用超音波・MRI デバイス用 LSI 設計・試作を行い動作確認と実装を行い課題を見出した。

#### (5) 製造・検査装置の研究

金属や樹脂を用いたウェハ接合技術のデバイスへの適応可能性を実証した。中性粒子ビーム装置を用いて超低損傷 Si エッチングを実証した。コンフォーマルコーティング装置でテフロンコーティング技術を確立した。三次元実装用非破壊非接触検査システム性能向上を実現した。三次元電磁界プローブにより LSI/MEMS の電磁ノイズ問題を明確化した。光制御並列電子源を開発し、リソグラフィ性能を評価した。

#### (6) 技術社会システムの研究

本拠点形成に向けてオープンコラボレーション、人材育成、拠点の世代交代などの方針と戦略についての提言を行った。

### d. 平成 22 年度

・計画； 基盤技術を拡充し、個々のマイクロシステムの研究開発を継続する。乗合ウェハ試作 LSI と MEMS の融合を図り、機能を実証して乗合ウェハシステムの有効性を確認する。いくつかのマイクロシステムが、コンセプトの実証段階から試作品開発段階に移行する。新たなコンセプトのマイクロシステムや関連技術の研究開発を開始する。

・実績

#### (1)次世代携帯機器の研究

乗合ウェハ LSI 上に SAW 共振子を集積化しデバイス動作を確認した。電力用マイクロインダクタの設計法を開発し 2.5W 級を設計した。LSI 上に磁性薄膜を積層し GHz 帯で放射ノイズ抑制が可能であることを明らかにした。マイクロ SOFC に混合導電性固体電解質電極材料を用いることで出力が向上することが確認できた。

#### (2)センサネットワーク・高機能センサの研究

表面弾性波応用センサを開発し歪センサの実現性を確認した。ガス分析用分光器を小型化したセンサネットワーク用デバイスを開発し、設計通りに動作することを確認した。遷移確率利用の過酷環境用センサ試作を行い原理を実証した。LSI と集積化した触覚センサ試作を行い動作確認ができ、課題を抽出した。

#### (3)光マイクロシステムの研究

$\mu$  ミラー光スキャナを使った距離画像計測装置を試作し、距離画像取得に成功した。ミラーアレーデバイス用の LSI を乗合ウェハで設計を行った。

#### (4)バイオ・医療マイクロシステムの研究

乗合ウェハ LSI を組み込んだ集積型  $\mu$  バイオセンサシステムを作成し酵素イメージングに成功した。そのシステムを展示会で発表した。MRI プローブ用 LSI および超音波デバイスについて、体内挿入可能な実装・集積化の試作開発を行い、磁場の撮像への影響がないレベルであることが分かった。

#### (5)製造・検査装置の研究

並列電子源のアレイ密度向上のため、光制御型電子源を開発し課題を明らかにした。ALD 装置を作製し SOFC 用複合酸化物製膜が可能となった。MEMS/LSI 融合実装システムの接続信頼性に影響する因子を定量的に明らかにし、三次元高信頼積層デバイス構造の基本設計指針が構築できた。MEMS デバイス特性へのプラズマ誘起欠陥の影響を検討した結果、無欠陥加工法としての中性粒子ビームプロセスの有効性を示せた。LTCC 基板の陽極接合と電気接続確立の研究を行い協

働機関で実施できるレベルにすることができた。

e. 平成 23 年度

- ・計画； 研究開発を継続し、いくつかのマイクロシステムが、コンセプトの実証段階から試作品開発段階に移行する。また、新たなコンセプトのマイクロシステムや関連技術の研究開発が進行する。
- ・実績

(1)次世代携帯機器の研究

SAW 共振子の性能向上を図り目標値を達成した。マイクロインダクタの設計を継続し巻線型を考案し性能向上の課題を見出した。CoZrNb 磁性薄膜を LSI 上に積層し 2.1GHz 帯で 15dB のノイズ抑制を実験的に明らかにした。エキシマレーザによる SOFC 用電解質膜と電極の最適化で数 mW/cm<sup>2</sup> の発電密度を室温で達成した。

(2)センサネットワーク・高機能センサの研究

表面弾性波素子の共振周波数変化・位相変化検知を実証し、実装も行いセンサとしての可能性を明らかにした。ガス分析用分光器型センサの分解能向上のため、新規干渉計開発を実施した。遷移確率利用の過酷環境用センサ用のシステム化開発も行い動作確認ができた。センサの SiC 化のプロセス開発も開始した。触覚センサのネットワーク化のため、配線取り出し法・データ処理の実験的課題出し・解析を実施した。

(3)光マイクロシステムの研究

μ アクチュエータの性能向上、駆動方式及び製作技術を研究し μ ミラーの性能改善を行った。光通信用ミラーデバイスの設計と試作、および集積化のため乗合ウエハ LSI 設計を行った。

(4)バイオ・医療マイクロシステムの研究

乗合ウエハ試作の改良型 LSI 評価を行い以前より特性向上した。その LSI 用周辺制御機器およびソフト開発が完了し、基礎的電気化学測定が行えるプラットフォームが整った。本システムの貸出によるニーズ探索を実施している。乗合ウエハ試作 LSI を集積化した MRI プローブを作成し、LSI の有効性を確認した。さらなる Q 値向上のため、乗合ウエハで新規 LSI を試作した。

(5)製造・検査装置の研究

光でスイッチング可能な電界放出型電子源アレーを開発し、任意形状で電子線描画できる装置を作成した。ALD 装置で組成制御の可能な YSZ、アルミナ、白金製膜が可能となった。中性粒子ビームエッチングにより、損傷の低下が実証された。中性粒子ビーム CVD により DLC 膜堆積実験を開始した。さらに FET への酸化膜堆積により、超高信頼プロセスの可能性を示した。高周波近傍磁界計測プローブ用に、増幅器・新規コイルを設

計し、高帯域の目標を達成した。LTCC 利用技術に関して、多孔質ビアの新しい形成法を開発した。

f. 平成 24 年度

- ・計画；いくつかのマイクロシステムが、試作品開発段階から実用化開発段階に移行する。開発したマイクロデバイスのシステムへの組み込みや実際のな形での試用を進める。

g. 平成 25 年度

- ・計画； LSI とマイクロシステムとを一体化する基盤技術の研究開発課題を解決し、拠点としての共用施設を整備して開かれた研究開発システムを構築する。また、分野ごとのマイクロシステム研究開発に適用できる LSI を開発し、高機能な集積化マイクロシステムを実現するための基盤技術を確立する。集積化マイクロシステムの機能を確認し実用化の見通しを得る。世界的な拠点に相応しい開かれた研究開発システム、人材育成・教育システム、および知的財産システムを整え、これらを自立的に維持する基盤を整備する。

h. 平成 26 年度

- ・計画； 実用化開発段階に移行したマイクロシステムの中から商品開発段階に移行するものを登場させる。

i. 平成 27 年度

- ・計画； 構築した研究開発システム、人材育成・教育システム、および知的財産システムを運用し、継続的に成果を生み出す。前年度の活動・成果を一層充実させる。

j. 平成 28 年度

- ・計画； 新規な知財取り扱いに基づく知財群および大学の知を触媒とした企業同士の研究開発を可能とする開かれた研究開発システムが確立され運用できる拠点が構築される。開発した融合化マイクロシステム技術が様々な分野で市場競争力を生み出す源泉となり、構築された拠点を運用して新たなイノベーションの種を継続的に生み出す。また、専門的知識を有するとともに、拠点を理解するマイクロシステム分野のイノベーションを支える人材の継続的供給源となる。そして、本拠点の成果を、企業が事業として育てていくことができる拠点となっている。

9. 年次計画

項目	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
◎機関全体としての拠点化構想	革新的マイクロナノ集積化・加工技術の開発				
基盤技術の開発	←		集積化・加工の産業化技術の開発		
応用展開	←		乗合ウェハによる融合デバイス、センサシステムなどの開発		
人材育成	←		人材育成プログラムの整備		
システム改革	←		知財財産制度の整備		
			開かれた共用施設を中心とする開かれた研究開発システムの構築		
◎補助金等充当計画	LSIとマイクロシステムの融合技術の研究				
基盤技術の開発（集積化技術）	←		LSIとマイクロシステムの融合技術の展開		
応用展開（集積化技術応用）	←		LSI集積化マイクロシステムの開発		
拠点設備の整備	←		基盤技術の展開による共用施設の整備		
産学連携モデルの構築	←		産学連携モデルの実践・検証		
			産学連携モデルの調査・研究・提言		
総計	750百万円	630百万円	637百万円	904百万円	1,097百万円
うち補助金分	302百万円	293百万円	300百万円	490百万円	591百万円

項目	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度
◎機関全体としての拠点化構想	革新的マイクロ・ナノ加工の産業化技術の開発				
基盤技術の開発	←		集積化マイクロ医療化ツール、集積化光システム、製造検査装置、高感度センサなどの開発		
応用展開	←		人材育成プログラムの推進・人材の供給		
人材育成	←		実用化・産業化		
システム改革	←		共用施設を中心とする開かれた研究開発システムの構築		
			開かれた研究開発システムの実践		
◎補助金等充当計画	LSIとマイクロシステムの融合技術の展開				
基盤技術の開発（集積化技術）	←		LSI集積化マイクロシステムの開発		
応用展開（集積化技術応用）	←		イノベーション実現のための実用化・産業化技術の開発		
拠点設備の整備	←		基盤技術の展開による共用施設の整備		
産学連携モデルの構築	←		産業化設備の整備		
			産学連携モデルの検証		
			開かれた産学・産産学共同研究開発・実用化開発体制確立		
総計	992百万円	1,400百万円	1,400百万円	1,200百万円	1,000百万円
うち補助金等分	559百万円	700百万円	700百万円	600百万円	500百万円

10. 諮問委員会

委員	所属	備考
川合 知二	大阪大学 産業科学研究所 教授	
岩井 洋	東京工業大学 フロンティア研究機構 教授	
井深 丹	タマティエルオー（株）代表取締役社長	
桑原 洋	日立マクセル（株）名誉相談役	
堀池 靖浩	筑波大学大学院数理物質科学研究科 客員教授	